

釧路【標茶町】

いとう ともこ
伊藤 朋子さん 手づくりクレヨン工房 Tuna-Kai 代表

1966年生まれ、岡山県出身。帯広畜産大卒。北海道での農業に惹かれて、道内で農業改良普及員となり、農家を目指すも断念。転職後に草木染めに興味を持つようになり、100パーセント自然素材のクレヨン制作の研究を進め、2008年に自ら工房を立ち上げ、2012年から一般販売を始める。



自然素材のクレヨンでみんなに笑顔届けたい

きっかけ

北海道の農業に憧れ、帯広畜産大に進学し、卒業後に農業改良普及員になりましたが諸条件が噛み合わず、農業を断念。転職して草木染めの講師をしていた時、1人の少年に出会いました。彼は化学物質アレルギーがあり、市販のクレヨンや絵具が使えず、色を使った絵が描けないことを知りました。この少年に思いっきり好きな色で絵を描いてもらいたいとの思いから、染色技術を応用した自然由来のクレヨンをつくるようになりました。

苦労

工房は、標茶町の老朽化し閉鎖していた旧青年会館を町役場から借りることにしました。家賃は格安でしたが、設備面の修復に苦労しましたね。それでも地元の方々が親身になって手伝ってくれて、小さな工房が完成。みなさんには本当に感謝しています。顔料は、地域に自生しているヨモギやタンポポ、ドングリなども使います。そのため鮮やかな色が出にくく、さらに時間が経つと固くなって描けなくなるなどの課題も。それでも試行錯誤を重ねながら、ようやく商品化することができました。

満足度

手間ひまをかけているので、各商品とも高価になってしまいましたが、東京都など首都圏の百貨店でも販売できるようになりました。購入されるのは、孫の誕生や入学祝いに購入される高齢の方が多いですね。自然の草木や土、貝殻などから煮沸して色を取り出し、それを蜜蝋に混ぜてクレヨンに、アラビアゴムを混ぜて絵の具に仕立てます。この取り組みに賛同してくれた画家やイラストレーターが、当工房のクレヨンや絵の具を使って、それぞれ得意分野の絵を描いてもらい、小さな個展を開くようになりました。

これから

「Tuna-Kai」はアイヌ語でトナカイを意味します。息子が4歳の時にパソコンで描いたトナカイの絵をロゴマークとして使っています。Tunaは「ものを運ぶ」、Kaiは「家畜」が語源。みんなに笑顔届けるトナカイでありたい、そんな想いを込めています。クレヨンと絵の具の顔料は20種類を超えました。もっときれいな色が出るよう研究を重ねると同時に、クレヨンや絵の具を使った個展も引き続き、開催していきたい。今春には、知床財団とコラボした「ヒグマ足跡パレット」を販売する予定で、準備を進めています。

北の★女性たちへの
メッセージ

手づくりのクレヨンは、1つ1つに個性があります。草木を煮沸する時間によって、発色具合が微妙に変化します。これって子育てに似ているのかな。子どもの個性を伸ばしてあげたい、そんなお母さんの気持ちって大切ですよ。

釧路【浜中町】

さんぜん
三膳ときこ
時子さん

認定NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト 理事長

1957年生まれ、浜中町出身。札幌市での短大進学・就職で一度浜中町を離れるが、地元に戻り結婚。1986年に発足した霧多布湿原ファンクラブを事務方として支える。2001年に、民有地を買い上げるナショナルトラスト活動を展開するための「NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト」の立ち上げと同時に理事長就任。



自ら遊んだ花の湿原を子どもたちへ残す

きっかけ

湿原は子どもの頃からの遊び場でしたが、ここが好きで東京都から移住してきたご夫婦が始めた喫茶店で旅行者と話すうちに、自分も気付かなかった魅力を知りました。ファンクラブを作ろうと会員を募りましたが、1986年8月に立ち上げてわずか4か月で1,000人を超えました。その後2～3年で会員は3,000人ほどになり、会報発行など裏方として関わってきました。湿原を保全し、子どもたちが花を身近に見ることができるよう、当初は地主さんから借りる形でしたが、買い上げてほしいという話をいただいたのをきっかけに、NPO法人を立ち上げました。

苦勞

理事長に就任して、実際に動き始めた時にはすごく後悔しました。ものを知らな過ぎて。いろいろな会議にも声がかかるようになりましたが、参加者には女性も少ないし、話をするのも苦手でした。今でも、皆さんの気持ちにこたえることができているのか、感謝の伝え方が足りないのではないかと、と思っています。でも、活動のたびに多くの方が集まり、とても暖かいメッセージが届いたりします。自分だったらここまでできるのかなと思うくらい。本当に感謝しています。会員は全国にいますが、機会があればできるだけ多くの会員にお会いしたいと思っています。

満足度

ファンクラブ発足から30年経ちました。これだけ長く継続して活動ができたことは、感慨深いです。1次産業の町なので自然と関わることが多い分、住民の皆さんも自然環境を大切にすることで、自分たちの生活に大きな影響がある、という意識が強くなったと感じます。レジ袋削減、エコバッグ持参運動も、それほど抵抗なく進みました。「湿原クリーン作戦や町内へのアピールなど、環境問題を長くやってきたことが啓発になった」「きれいな湿原という活動が、ごみの減量の啓蒙になっていた」と言われて、うれしかったですね。

これから

世代交代を常に考えていますが、なかなか実現できないのが課題です。地元の若い方々とつながって、ガイドなどの技術を身に付けて活動に参加してくれたらいいな。霧多布高校にはボランティア同好会があって、木道づくりなど色々お世話になっています。最近は地元の方々などを講師に招いて「浜中学」という授業を行っています。学んだことを実践する場所として、トラストを活用してほしいという話もあります。2016年の夏には、高校生とのコラボレーションが実現する予定です。高校生が花の湿原を案内するなんて、楽しいと思いませんか。

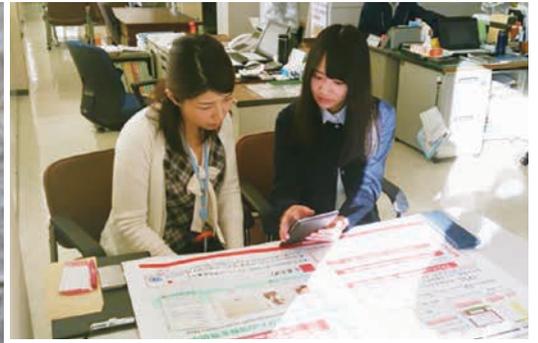
北の★女性たちへの
メッセージ

人と会うのが好きで、楽しいと思いながらやり続けることができました。楽しいことの割合を多くすると、もっと頑張ってしまうのが女性かもしれない、と思います。ここは本当に不便なところですが、湿原に立って広大な自然のままの花を眺めると、心が安らぎますよ。ぜひいらしてくださいね。

釧路【白糠町】

つちだ しおり
土田 栞さん 釧路公立大学経営学科4年生

1994年生まれ、白糠町出身。現在も白糠町から車で大学に通う生粋の「白糠娘」だが、大学2年生の時には、語学留学のため、カナダのバンクーバー市で4か月間のホームステイの経験を持つ国際派でもある。



マタニティに優しく寄り添うアプリを開発

きっかけ

「栞を妊娠していた時は、陣痛がひどく、記録するのに苦労したのよ」と母から聞いたことがスマートフォン向けのアプリ「陣痛ダイアリー」開発のきっかけです。特に、初めて出産する方は痛みに加え、不安と闘いながらの日々となります。スマホで手軽に記録できるアプリがあればマタニティの負担が減るはず、と考え開発を始めました。病院から遠隔地に住む方にとっても、手軽に記録できて病院連絡の際に役立つので、不安解消につながるのでは、と思っています。

苦労

ITの知識に乏しく、妊娠も出産も未経験ですので、開発当初は「本当に大丈夫かな」と考えました。どの程度のニーズがあるかも未知数でした。アプリをより身近に感じてもらい、利用しやすいようにするために、マタニティの模擬体験もしてみました。陣痛というマタニティに非常に負担のある状況で使用してもらうため、安全性と正確性には特に注意し、医療関係者の方を中心に多くのアドバイスを受けました。苦労は多かったですが、その分、達成感も大きかったですね。

満足度

開発の際には、医師や看護師、助産師の方から多くのアドバイスをいただきました。また、機能の検証では、お産の時期を迎えているマタニティの自宅を訪問し、彼女たちの要望を聞き反映させました。実際に使った方からは、「初めての出産で不安があったが、このアプリのおかげで安心してお産の時期を過ごすことができた」との評価を受け、大変うれしかったですね。内閣府の「2015年度女性のチャレンジ賞」を受賞できたことも、多くの方に協力いただいた結果だと思っています。

これから

今回のアプリ開発では、一つのものを作り上げていく楽しさを経験しました。できあがったものを評価していただいたことはもちろんうれしいのですが、それよりも、さまざまな方の協力をいただき、開発したアプリを地域社会に向けて投入する過程が何よりも大きな財産になりました。2016年春には、社会人になります。開発系の仕事ができるかどうかは分かりませんが、いずれ結婚し、家庭を持ち、30代、40代になっても、仕事と家庭を両立していきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

「マタニティに思いやりを」というコンセプトでアプリを開発しました。開発を通じて、医療過疎地域の現状も知ることができました。出産は、配偶者の方の理解と協力が不可欠です。社会人になっても、女性が安心して出産できる環境作りに向けて役に立てれば、と思っています。

釧路【鶴居村】

はっとり きちこ
 服部 佐知子さん ファームレストラン ハートンツリー オーナーシェフ

1961年生まれ、旧・阿寒町(現・釧路市)出身。22歳で結婚し、30歳の時に北海道で憧れだった酪農業に携わる。1999年に鶴居村で「ファームレストラン ハートンツリー」を開設。チーズ工房などの体験型施設などを備え、常時、国内外の若者をホームステイで受け入れている。



酪農家の応援団であり続けたい

きっかけ

大阪府阿倍野区の辻調理師専門学校に進んで、フランス料理から製菓、製パン技術を学びました。大阪府で夫と結婚。北海道で子育てをしたいとの思いがあったので、憧れていた酪農の仕事を探して標茶町に移住。まずは町営牧場でお手伝いを始めました。その後は、鶴居村で酪農家を手助けする「酪農ヘルパー」になり、牧場ごとで異なる生乳のおいしさを発見しました。得意な料理でこの味を表現して、多くのお客さんに喜んでもらいたいと思ったのがきっかけです。

苦労

本当は牧場を兼ねたレストランをやりたかった。ただ酪農をするには、牧場の敷地や乳牛の確保、生乳を搬送するルートなど、さまざまな制約があったので諦めました。レストラン開業も、資金繰りが大変でした。親交があった地元の大工さんが、親身に面倒を見てくれ、鶴居村雪裡地区の小高い丘の上に小さなレストランを作ってくれました。酪農ヘルパーで担当した牧場に足を運んで、生乳の提供を求めたほか、地元農家にも採れたての野菜を分けてほしいとお願いし、ようやく現在のスタイルが出来上がりました。

満足度

小さなレストランから始まり、チーズ工房や農家のD型ハウスを改装した宿泊工房、バーベキューハウスなどの各種施設を夫と一緒に作りました。食育活動では、地域の小学校で料理教室を開いたり、海外の料理を学ぶため、地元の農家さんと一緒に研修旅行に行ったりしています。さらに国際的な農業体験と交流を図る「WWOOF Japan (ウーフジャパン)」のホストに登録。ホームステイしている外国人の若者が、レストラン業務を手伝ってくれます。毎日たくさんの仲間と囲まれ、とても賑やかで楽しいですよ。

これから

酪農家など多くの方の協力で、おいしい料理を作ることができます。今は、生乳を牛乳として販売できるよう、準備を進めています。当レストランは、ずっと酪農家の応援団でありたい。おいしい生乳が採れるからこそ、チーズやヨーグルトなどの発酵品ができ、パンやピザなどにアレンジできます。この豊かな食材は、地域の宝です。調理法を教える料理教室も充実させていきたい。ここで学んだ若い外国人が、自国に帰ってミルクカレーなどのメニューを広めてほしい。夢は世界中に「ハートンツリー」ができることです。

北の★女性たちへの
 メッセージ

丘の上の木には、心がむむハートがある。この店はそんな思いを込めています。名字の「はっとり」にも掛けています。心むむ空間を、という夢を実現するために努力を重ねました。でも、まだ夢の途中です。みなさんもNever Give Upの気持ちを持ってDreams come trueになるよう、一緒に頑張りましょう。

釧路【弟子屈町】

ふじわら たみ
藤原 多美さん 宿・花ふらり オーナー

1969年生まれ、京都府出身。京都府の堀川高卒業後、宝塚音楽学校に合格し、宝塚歌劇団に入団。1990年に「ベルサイユのばら」で初舞台。14年間にわたって花組の男役のタカラジェンヌとして活躍する。退団後、長年の夢だったペンションを、2006年に阿寒国立公園内に両親と3人で開設する。



元タカラジェンヌの転身、手づくりの料理でおもてなし

きっかけ

幼いころからピアノを習っていて、親との約束で高校卒業時の1回だけということで宝塚音楽学校を受験し、合格しました。その後は、タカラジェンヌとして32歳まで舞台上に立っていました。北海道には公演で何度か訪れ、その都度、自然の美しさ、雄大さに心を打たれました。厳しい稽古と舞台の合間に行くプライベート旅行では、いつも家庭的な雰囲気のパensionに泊り、心が癒されました。演者としてお客様に喜んでもらうことと、ペンションでのおもてなしが共通するものだな、と気付いたことが、ペンション開設のきっかけです。

苦労

「北海道でペンション経営なんて成功しないよ」ってよく言われました。確かに、全くの素人がペンションを始めるのは、とても大変なことでした。まずは親交があった京都府のパensionで、食事の修行をしました。調理師免許も取得しました。ペンション探しでは、良い物件がなかなか見つからず、最終的に中古のパensionを購入しました。その後リフォームやインテリアの入れ替えなど、慌ただしく準備を進めました。さらに、幼いころから使っていた思い出のグランドピアノの搬入も大変でした。提供する料理のメニューは、今でも奮闘しながら考えています。

満足度

ペンションから見える釧路川河川敷の風景がとても美しく、皆さん喜んでくれます。周遊旅行の拠点として、夏場は多くの方が宿泊してくれます。リピーターの方との再会も楽しみの一つです。2006年の開業時から、グランドピアノを囲んだ「ミニミニコンサート」を定期的に開催しています。今ではすぐに予約で埋まってしまうほど好評で、音楽を通じた地域の方々との交流に充実感があります。私は、何よりも犬好き。人懐っこい4匹のラブラドルレトリバーと就寝を共にし、犬たちと一緒に接客してくれるのは幸せですね。

これから

多くのお客様と地元の農家さんなどの支えもあって、2016年4月で開設10周年を迎えることになりました。これからも、道東地方の魅力を伝えていきたいですね。釧路川でのカヌー体験や、神秘的な雲海が綺麗な摩周湖、屈斜路湖などを多くの方に自ら案内したいと思い、2015年末に旅行業の会社を立ち上げました。今後は、旅客自動車運送業を取得する予定です。さまざまな可能性を探りながら、地域の方々と一緒に道東観光、さらには地域社会を盛り上げていきたいと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

「あきらめない」ことも大事ですが、その前に「頑張っていれば必ず誰かが見てくれている。自分を信じてあきらめない！」が私の元気の素です。人に何を言われようが、まずは自分の意思を信じて、行動することが重要なのかもしれません。立ち止まることなくね…。

釧路【釧路市】

もりさき
森崎みきこ
三記子

さん 釧路モカ女性プロジェクト 代表

1956年生まれ、釧路市出身。東日本大震災直後の2011年5月に、5人の仲間と市内の喫茶店でモカシェイクを食べながら会を立ち上げる。漁網を使ったボディタオルなどの売り上げは8,000個近くに達し、釧路市を代表するヒット商品に。



「人づくり」基本に、自分らしく輝く女性を支援

きっかけ

普段はハローワーク釧路のキャリアカウンセラーとして、仕事と子育ての両立をサポートする個別相談を担当しています。この仕事に就いて10年ほどになりますが、才能豊かで、情熱もあり、高い技術を持っているのに、さまざまな事情でそうした能力や情熱を発揮できないで、孤独感を募らせている方たちが多いことが分かり「もったいないな」という思いが強くなりました。「つなげれば強くなる」と考えて、2011年に「モカ」を立ち上げました。「もっと大きくカッコよくありたい」が名前の由来です。

苦勞

立ち上げから5年目を迎え、会員にも温度差が出てきたように感じます。漁網タオルとたわしが好評なのはうれしいのですが、「モカ」の目的は利益を上げることではなく「人づくり」です。「もっと事業をしたい」という方がいる一方で、「研修会を」という方もいて、正直舵取りには苦勞することがあります。でも、最近は無理に型にはめようとせず、「モカ」の原点である「人づくり」を基本に、自分らしくしたいことをどんどんしていこう、と思うようになりました。

満足度

「勉強会の場所代ぐらいは稼ごうか」と軽い気持ちで始めたのが、さんま漁網を使ったボディタオルの製作と販売です。漁網屋さんから無料でいただいて作ったのですが、これが想像以上に好評で、姉妹品のたわしと合わせて、今では活動の貴重な財源になっています。うれしいのは作業に携わっている方たちの反応です。彼女たちは、社会とつながりたくても育児や介護などでままなりません。「この場所があって本当に救われました」という声を聞くと、「モカ」やってて良かったな、と心から思います。

これから

30代で離婚してから、小学生と幼稚園の3人の子どもたちと生きていくために、仕事は何でもやりました。さまざま場面での人との出会いが背中を押してくれました。ハローワークで相談を受けていると、当時の自分に似た方が大勢います。そんな方たちに「自分らしく生きていいんだよ、もっと輝けるんだよ」と声をかけ、「困ったら『モカ』においで」と言えるような場所になれば、と思っています。釧路のまちが大好きです。釧路市に住む女性がもっと元氣になれば、まちも輝くと思います。そのお手伝いをしたいですね。

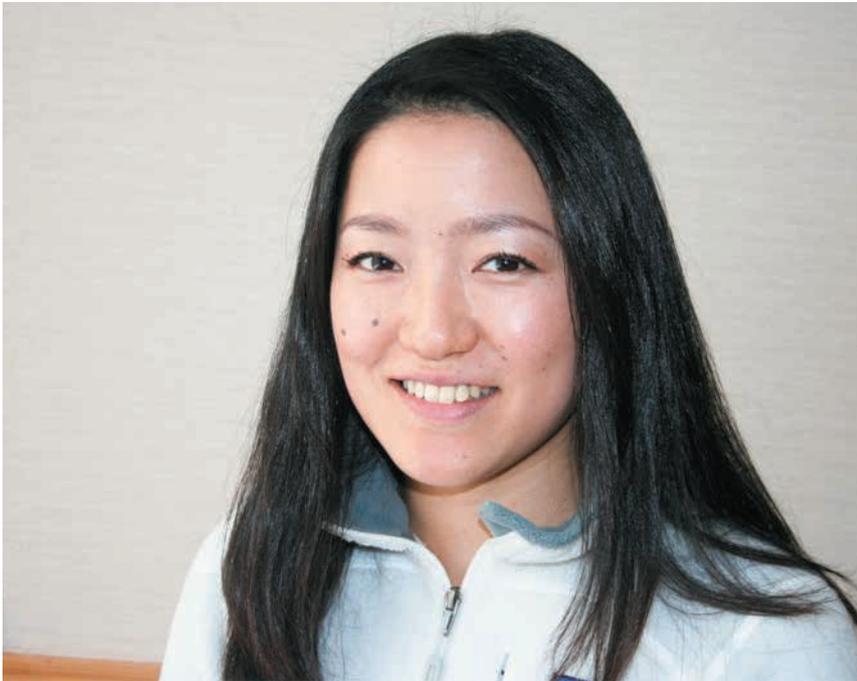
北の★女性たちへの
メッセージ

子育て中の女性は、社会とのつながりが薄く、孤独感に包まれています。そんな女性がつながって元氣になれば、家庭も明るくなり、地域にも活氣が生まれます。「自分らしく輝いて地域を元氣にしよう」という女性が増えてくれれば、と思っています。

根室【羅臼町】

ごとう なおこ
後藤 菜生子さん 株式会社知床らうすリンクル 代表取締役

1982年生まれ、埼玉県出身。福島県内の動物病院に就職後、2008年から羅臼町で環境省のアクティブ・レンジャー（自然保護官補佐）に就く。知床国立公園内の動植物の生態調査などに携わりながら、2013年に自然と地元の漁業などを案内するガイド会社「株式会社知床らうすリンクル」を設立する。



自然と共生する地域住民に魅せられて

きっかけ

山登りが好きな両親だったので、幼いころから妹と一緒によく山に行きました。自然の中で動植物に触れることが多く、その影響もあって東京の専門学校では、環境工学を学びました。その後は動物病院に勤務しましたが、憧れの知床でアクティブ・レンジャーの募集があると聞き、羅臼町への移住を決断しました。手つかずの大自然はもちろんですが、厳しい環境下で漁業を生計としている住民にも惹かれ、知床を多くの方に案内したいと考え、会社を立ち上げました。

苦勞

周りからは、道外から来た自然好きな若い女の子ってイメージがあるかと思います。それでも自ら地域の方々の中に飛び込んでいって、色々なことを教えていただき、さらに学ぶことで、より一層知床が好きになっていきます。知床半島を周遊する観光ツアーは同業他社が多いので、個性を出さなければなりません。そこで少し視点を変えて、地元で昆布漁を営む方々を紹介しながら、その方たちの歴史と文化を学ぶ産業ガイドを企画するなど、試行錯誤しながら頑張っています。

満足度

四季ごとにさまざまな表情を見せてくれる秘境の地、知床。アクティブ・レンジャーで何度も足を運んだ羅臼湖はお気に入りの一つ。6、7月に残雪の中を長靴で1時間ほど歩くと、おそらく日本で一番遅く咲くエゾヤマザクラが見えてきます。お客様は、そのコントラストの素晴らしさに感動を覚えます。私もその姿を見て共感し、この仕事を誇りに思ったりします。地元の漁師さんは、市場セリの見学や漁船でのウニ漁見学ツアーなど親身になって協力してくれるので、とてもありがたいですね。

これから

知床の世界自然遺産登録から10年が経ちました。多くの観光客が訪れていますが、自然の宝庫・知床の環境保全と観光推進については、いま一度考え直し、地域との繋がりを密にしながら、各種ツアーを企画していきたいですね。2014年から、東京都でデザイン関連の仕事をしていた妹・真希子が羅臼町に来て一緒に仕事をしています。パンフレットやホームページづくりなどを担当してくれるので、とても心強いですね。海産物の包装や商品パッケージのデザイン提案など、仕事の幅を広げていければと思います。

北の★女性たちへの
メッセージ

会社名の「リンクル」は、Link（リンク、つながる）とCycle（サイクル、循環）を合わせた造語です。支え合い、つながって暮らすのが「人」ですが、そんなLinkな感覚を羅臼町で感じています。女性ならではの感性や発想を打ち出し、それを高めてCycleすると新しい発見があるかもしれません。何事にもチャレンジ！ですね。

根室【中標津町】

まつみ 松實 とよみ さんとよみさん NPO法人子育てサポートネット る・る・る 代表

1956年生まれ、釧路市出身。釧路保育専門学校を卒業後、保育士となる。結婚後、中標津町に移住し、2人の子育てに励む。地元で起きた高校生による殺傷事件を契機に1999年に「ホットハンド」、2009年に「る・る・る」を設立。地域の子育て支援の旗振り役として奔走する。



独りで悩まず、家族がいつも笑顔でいられるように

きっかけ

28歳の時に自動車整備業を営む夫と結婚し、中標津町に移住しました。見ず知らずの地で、ひとりで子育てすることにとっても不安がありました。そんな中、長男と長女が小中学生だった1998年と1999年に中標津町で高校生による殺傷事件が連続して発生したのです。これから子どもたちはどうになってしまうのだろうと心配し、6人のお母さんたちと一緒に子育て支援ボランティア「ホットハンド」という団体を設立。0歳児から高校生の子どもを持つ保護者にアンケート調査をしたのが、活動のスタートです。

苦労

中標津町は転勤族の若いお母さんが多い街です。活動当初は子育て支援という概念がなく、子育てに関する相談は、身内しかできないような状況だったと思います。最初に子どもとお母さんが集まるサロンを開設しましたが、来場者は少なかったんです。それは、子どもを連れて公園デビューする時の気持ちと同じなんじゃないかな、とったりしました。それでも活動に共感してくれる先輩ママが協力してくれて、PR活動に励んでくれました。ただ活動の基本はボランティアなので、経営者としてスタッフを束ねていくのは大変ですね。

満足度

「る・る・る」という名称は「人がいる」「集まる」「場所がある」の語尾から取ったものです。ひとりで子育てする若いお母さんにとって、こんなに心強い言葉はありません。ママ友のコミュニティは重要なんですね。スタッフは30～40代の先輩ママが中心で、看護師・保健師・保育士などの資格を持った方が集まっています。母乳育児相談から産後のボディケア・フィットネス教室、アレルギー対策教室、料理講座など、魅力的な事業を展開。まさに目指していたことが現実になり、とても充実感があります。

これから

育児をしながらパートやアルバイトをしているお母さんが増えているので、今まで以上に心のケアを含めたきめ細やかなサポートをしていこうと思います。少子高齢化が進むにつれ、子育てを終えられた50～60代の女性は、これから親の介護もしなければなりません。ようやく「る・る・る」の活動が軌道に乗ってきました。活動を理解してくれる方もたくさんいます。そんな方々と一緒に世代を越えて、子どもと高齢者の面倒を見てあげられるような地域社会を創りあげていきたいと考えています。

北の★女性たちへの
メッセージ

理想の実現は難しいですね。でも、人が集まり、意見を出し合えば、その理想が叶うこともあります。独りで悩まず、相談できる方を探してみてください。子育ても一緒です。あなたの地域にも、私たちのような団体があると思います。家族がいつも笑顔でいられるように。一緒に頑張りましょうね。